

ラミィ・ねね・ポルカ「「頑張れししろん！！！！」」ぼたん「w
w w w w w」～リンバウムに迷い込んだホロライブ五期生～

SOD

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ホロライブ・プロダクションに所属するアイドルVTuber。

我が5期生がコラボ配信中にいつの間にかリンバウムに転移していた!!

しかもカラダはホロファイブ!!

言えばなんとかしてくれる『獅白ぼたん』

顔が肝臓『雪花ラミイ』

男子小学生『桃鈴ねね』

おまるん『尾丸ポルカ』

ホロライブ5期生の4人は果たしてこの先生きのこれるのか!?

ラミイ・ねね・ポルカ「頑張れししろん!!!!」

ししろん「お前らも戦えwww」

突発的に書いたので、続くかは人気次第ですね。

目次

ラミイ・ねね・ポルカ 「「転生したぞししろん!!!」」ぼたん 「草」	1
ポルカ 「ラミイとねねちに見捨てられたんだが!」ぼたん 「おまるん、弓狙いづらいからちよつと食べられてて欲しい。」ポルカ 「ししろん!???」	6
ねね 「何故ねっ子だけやたら少ないのか!!?」ラミイ 「メタ発言やめなーw」	10
ねね 「これでラミイ水も許される……」ラミイ 「いやラミイ水は許せんわ」ねね 「えー!!なんで〜!!」	15
ししろん 「力が欲しいか……w w w w w」ねね 「力が欲しいな」	19
ねね 「お前もねっ子にならないか?」読者 「すまねえSSRBなんだ」読者 「同情で票入れようと思ったけど雪民のプライドが許さなかつたんだ……」	25
夜会話——『???』	31
二日目	
ポルカ 「で、このドラゴンなんかはぎ取れたん?」ぼたん 「鱗が固くて無理です」ねね 「これ食べられるかな?」ラミイ 「拾い食いやめなー!!!」	36
かなた 「リインバウム?」白上 「現実じやい。」友人A 「事後処理が………つつ」	41
ねね・ポルカ・ラミイ 「「助けてししろん!!!」」ししろん 「やつべえ死にそうw w w」	45

ねね「ねねも頑張るぞ!!」ぼたん「成長したな……ねねちゃん。」

51

『ポルカ、おるか？ポルカおらんかー？』ポルカ「サモナイト石返せ」

55

ポルカ・ラミイ（絶句）

62

ラミイ・ねね・ポルカ 「「転生したぞししろん!!!」」ぼたん「草」

ねね「えー!えつくす!えー!ぜつとあーるえつくす!!」

ラミイ「ねねちゃんもうちよつと小さい声でお願いしたい!」

ポルカ「見てから回避出来ない余裕でした!」

ぼたん「回避出来てねーじゃねーかよwww」

その日は、5期生でコラボ配信をしました。

ラミイ・ねね・ポルカ「助けてししろん!!!」

ぼたん「wwwwww」

ほんといつもどおりの配信をしてただけなんだよねー。

5期生全員でのコラボ配信。あたしがいつもどおりパンパン撃つて、ねねちゃんが騒いで、おまるんがひいひい言つて、ラミちゃんがツツコんで。楽しい配信をしてたんよ。

いや〜…ほんと何が悪くてこうなつたんだろうね?

ラミイ「え……?どこ此処?え?何で私ラミイになつてるの??」
はじめに異変に気づいたのがラミちゃんだった。

私達はホロライブプロダクションというVTuberアイドルの事務所に所属するタレント。

ネット世界の中でのみ、私達は私達ではなく、VTuberアイドルになれる。

『私』が『獅白ぼたん』でいられるのも、当然ネットの中のみの特権だ。
なのに何故か私達……

ポルカ「おまるんになつてるううううー!?」
ねね「うおわっ!?ねねじゃん!?ねね、ねねになつてる!!」

ホロライブ5期生こと『雪花ラミイ』『尾丸ポルカ』『桃鈴ねね』そして私『獅白ぼたん』。何故か機材も何も無いのに、カラダがホロフアイブになつて、しかもなんか海辺の、明らかに人工整備がされていない草ボーボー、樹木生える天然の島みたいな場所で転がってました。

鏡も無いけど、衣装は見慣れたものだし、あともう手先の肌ツヤとかそういう明らかに自分じゃないカラダの美しさ。

そして少なくとも他3人の容姿が互いに完璧に把握できるわけだから、自分がホロライブになっていることは瞬間的に把握できるわけだ。

ぼたん『わー……何が起きたんだこれ?おわっ!?コケる!』
ししろん手足長つ。身長高つ。バランス取りづらいぞこれ。

ウエストが細いのナイスバディはガチで嬉しい。あ、尻尾も生えてる。こいつ動くぞ。

ラミイ「ちよつ、これどうなつてんのー!」

ラミちゃんはありえない非現実的に納得の出来る答えが出ずに狼狽えて。

ポルカ「あっ!?そう言えば、配信途中じゃん!!ヤバい放送事故!!」
根が真面目ちゃんながら人格百面相なおまるんは、頭の切り替えが早いのか現実逃避なのか分かりづらい反応をして。

ねね「ねえ何でねえだけ初期衣装じゃないのー?
せつかくなんだからボンボン付きにすれば良かったのにー!

BANか!?こんなところでもBANなのかー!」

ねねちは、もう既にこの状況に適応して自分の衣装が初期衣装じゃ

ないことにブーたれていた。

さすがねねち。男子小学生の異名は伊達じゃない。

とりあえず、みんなが一緒だったことで私も少しずつ頭が落ち着いて、視野が広がってきた。

すると、近くの木に刺さっている物が目に入る。

ぼたん「矢じゃん。」

ねね・ポルカ「ヤだー!!」

ラミイ「言うてる場合かつ!!何で矢が刺さってんの!?ホントにここ何処なの!?!?何で私達ホロフアイブなの!?!」

ぼたん「いやー分かんないなあ…」

運営のドツキリとかだったらもうホロライブ世界取れるで。

とか

お肌ピチピチの美少女になれたし良いんじゃない?

とか、ふざけたことはいくらでも言える程度には頭は回ってるけど、この状況は私も教えて欲しいわ。

ねね「ねね分かった!!これ異世界転生だよ!!

ねねたちきつと異世界にいるんだよ!!」

ポルカ「……………あー…そう、なんかな?」

ラミイ「いやいやいや!!嘘でしょ!?!そんなことある!?!」

ポルカ「だつて……………ねえ?私達ホロフアイブなことがまず全然つ説明出来ないしさあ」

ラミイ「やだやだやだ!!絶対やだ!!お家帰してええええー!!!運営さああああーん!!ラミイギブアップですうううー!!」

みんなが話をしている横で、私は刺さった矢をそつと抜いてみる。鏃が付いている。試しに葉に当ててスツと引いてみる。ナイフみたいに、それが当然の現象であるかのように切れる。

弓はあるのだろうか？周囲を見回す。

ぼたん「……………あつた。弓」

あつてほしくは無かった気もするな。でもこれはまだギリギリ地球にも現役で使っている国があるからまだ多少はセーフで……………

「ギャギャギャー!!!」

ラミイ「ひいつ!?!」

ポルカ「きやあつ!」

ねね「うおっ!!出た!!」

緑色の、四足歩行。

尖った口にギザギザの歯。

手先には水かき。

魚類が人型になったような何かが、突然森の奥から姿を見せた。

それは当然、地球では確認されたことの無い生き物。

それは勿論、V T u b e rとは違うし人間でも無い生き物。

「ギャギャギャー!!!」

ラミイ「も、モンスター…………ウソお…ウソでしよう…………」

ポルカ「これはヤバイよ!?!明らかにキバ向いて威嚇して来てるよ

!？」

ねね「モンスターとの初戦闘キター!!あれ?武器は?」

私達、ホロライブ5期生。どことも知らない場所に、本当に異世界転生しちゃったみたいですね。

アレ……?」

ぼたん「これ、あたしが戦うしかなくない?」

手元には弓と矢が一本きり

どうやら、初戦闘はオワタ式の一発勝負をぶっつけ本番で強制されるクソゲー仕様らしいです。

慣れないカラダに射った経験の無いガチ弓と、ガチモンスターと殺し合いかあ………うん。

ぼたん「みんな!!逃げるぞ!!」

ラミイ・ポルカ・ねね「はい!!!!」

息はピッタリ仲良し5期生。一斉にバラバラに逃げ出したのでしたとさ。

ポルカ「ぎゃあああああー!!!!」

あ、おまるんが追われた。

こんな地球温暖化だの森林伐採だのと騒いでる惑星のお隣さんは、ほんとーに自然豊かで美しいですねえ。羨ましいですよー。

ぼたん「ねえ、おまるん。走ったままで弓で狙うのきついから止まってー」

ポルカ「え、あ、はい。いや死ぬが?」

ぼたん「いや、おまるんはダイジヨブだ。」

ポルカ「何が???」

ぼたん「おまるんは元気があるからダイジヨブだ」

ポルカ「元気で命が買えるかア!!!」

ぼたん「wwwwww」

ゲラゲラ笑ってやがる…だと?!まさかこのライオン、この魚人と一緒に私を食うために付いてきたんじゃねえのか!?

「ギャギャギャ」

ポルカ「お前もこころなしに笑ってんじゃねえよ!!」

罅が明かない!話が進まない!このままじゃ私は助からない!!延々走り続けることになる。

何故か不思議とまったく疲れないけど後ろから着いてくる疲労以上の敵が怖い!

ぼたん「ところでおまるん。私ら明らかに本来の肉体スペックが無視された体力してるよね?」

息一つ切れてないぞ」

ポルカ「それは思った!絶対に今私達は肉体年齢とかがホロファイブに依存してる!絶対に若返ってる!

青春取り戻せるぞこれ!!生き残ってさえいたらな!!」

ぼたん「んで敵が魚人?なわけじゃん。」

ポルカ「魚人だねえ!アーロンかな?」

ぼたん「周囲は自然に囲まれてるじゃん?」

ポルカ「ワイルドライフだねえ!!だから何?!しろんにはもしかしたら分かってもらえてないかもしれないんだけど、ポルカ今ちよつと軽く命がピンチなんよ!!」

ぼたん「おまるんが木に登ればそいつ追ってこれんくない?おまる

んってたしかサーカス団員でしょ？」

何をバカなこと言ってるんだよししろん。いくらサーカス団員だからってそんな簡単に木に登るなんてこと出来るわけないっしょ？

ほら見てみるよ、足元で木をガリガリしてる哀れな魚人を――

ポルカ「……………あ、登れたわ。」

「ギャギャギャー！！！！」

ぼたん「よしよし。そして弓なんて射ることのないライオン生を生きてきたこの獅白ぼたん。

一本しかない矢で敵をキルしたいなーなんてそんな時に取る行動は――」

しゅつとした綺麗な足を肩幅に開き、弓矢をつがえたししろん。それまでタレ目寄りだった目が一瞬で変わる。

「ギャギャー!!ギャーオ!!」

ようやく振り向いたことで、魚人はししろんに気がついた。でも、もう遅い。

普段はゲライオン、お猫さま、ししろん。可愛げいっぱい最期まで愛嬌たつぷりな獅白ぼたんは、今はもう

ぼたん「おいしい。あと1秒遅かった。FPSでは致命的だよ」
獲物を狩る獅子だ。

「ギッ——?!?」

つがえた鏃の先の1秒先はを見据えた景色は、3cmにも満たない生と死の間を貫く。

現実と真実の旋律が、未来を――否、モンスターの一瞬の絶^死叫を奏でた。

ポルカ「……………言えばなんとかしてくれるー獅白ぼたん。」

ぼたん「Beautiful」

野性味あふれる表情と、健全な子供のような心境で、ししろんはやりきった顔で笑った。

ポルカ「実際に目の前でやられると……惚れるわあ、ししろん。」

ねね「何故ねっ子だけやたら少ないのか!!?」ラミイ「メ
タ発言やめなーw」

こんらみです。ホロライブ5期生雪花ラミイで――

ねね「ねっ子がいなああああああーいっ!!!??」

ラミイ「きやつ!?なにになに!?どうしたのねねね!」

ねね「ねっ子がいないんだよう!!」

ラミイ「意味が分かりませんが!」

ねね「どうして意味が分からないの!?ねっこがいないんだよ!!この
小s――!!」

ラミイ「メタいこと言うのやめなー!!!」

改めましてこんらみです。雪花ラミイです。突然ですが私の悩み
を聞いて下さい。

今私は、頼れるららいおんことししろんと逸れてしまい、よりにも
よって一番面倒くさい同期であるねねねと二人きりになってしまっ
たのです!!

ねね「ラミイちゃんねねのこと嫌いだったの!?!」

ラミイ「心読むのやめなー!!!嫌いではないよ。嫌いではないけど
もー……よりによってこんなことも分からないような島で2人き
りで居ることにラミイは不安を隠せませんっ!まがまがくずだよ!?
ちよー縁起が悪そうじゃん」

ねね「あっはっはっはっはー!大丈夫だよラミイちゃん。ねねたち
異世界に来たんなら主人公だもん。何があってもなんとかなるって。
最悪お腹減ったら、つらら生やせばいいじゃん!」

ラミイ「つらら食べんわ!!そもそもラミイは手から氷とか出さない
から!」

ねね「案外今なら出るかもよ?転生特典!転生特典!」

ラミイ「そんなもんあるかい!!ラミイ達いつの間にかおっただけやろがい!!」

あーめんどくさい。やっぱりねねねとふたりきりでこんなところにいるんはキツイ。

ししろんはどこ?

ラミイのししろんはどこいったの?あとついでにおまるん。

『ポルカはついでかい!!!』

何か幻聴が聴こえた気がする。気のせいだね。

ねね「あー、おまるん、元気にしてるかね?ねね達完全に見捨ててきちやったもんねえ」

ラミイ「それはさー……あー……言いつこなしじゃん……?やめなー。」

ねね「おまるん、センチティブなことになってないと良いけど」

ラミイ「やめなー!!!ちよつとお!バカかお前は!!」

お、おまるんが、あの怪物と……人じゃないじゃん!!」

ねね「えー、そんな珍しいことじゃないでしょう?割と人間と人外のさあ」

ラミイ「やめなああああああああああー……!!!!!!」

ラミイ↓天の視点

獅白ぼたん、上手いこと敵を打倒しました〜はい拍手ー。

ポルカ「ああ……すまないねえ異世界座員さん第一号。ポルカはア

イドルだから、無理やりなお触りは垢BAN死を持って償ってもらうしかないんだよ

……」

ぼたんがヘッドショットを決めてお亡くなりになった座員○に両

手を合わせて黙禱を捧げるポルカ。

その目には僅かな涙。襲いかかってきたとはいえ、それでも自分を気に入って追いかけてきた命に、僅かに思うところもあつたのかもしれない。

その横には、遺体を漁る獅白ぼたん。

ぼたん「なんか良いものドロップしないかな〜?」

ポルカ「ちよお!?!ポルカの座員さんなんですけど?!」

ぼたん「愛してやれないならいつそ極限まで突き放してやるのも優しさだつて〜」

ポルカ「突き放すどころか、身ぐるみだけ分離させて同行させようとしてますがそれは?」

ポルカの言葉にゲライオンしながら、ぼたんは剥ぎ取りを続けつつ話は逸し始めた。

ぼたん「いや〜格好良く決まったねえ〜これはSSRB団から着火済みが増えるねえ」

ポルカ「うん、まあ。ポルカ散々な目に遭いましたけどね?」

ぼたん「上手いこと連携も出来てたし良かったねえ〜」

ポルカ「うん。ポルカは走つて木に登つただけでしたけどね?犬かな?煽てられて木に登つたのかな?」

ぼたん「でも一本しか無い矢も使つちやつたし、次に敵が出てきたら本当に危ないね。おまるんが」

ポルカ「いやその理屈はおかしい。ポルカ達二人なんだから危険は半々でしょ!?!ポルカが狙われる前提なのおかしい!!」

ぼたん「だって事実狙われてたじゃん。新しい座員さんにw」

ポルカ「だから剥ぎ取りやめーや!!それポルカの座員さんー!!」

ぼたん「おお! 斧持ってた。ドロップドロップ♪」

ポルカ「何故。」

ぼたん「んー。あ、これねねちゃんしか装備出来ないつて書いてあるじゃん。

あとであげよう。」

ポルカ「へ？いやいや、ししろw装備出来ないって、ゲームじゃないんだからw」

ぼたん「いやでもほら、よく見るとこれステータス表示されてるよ？」

ポルカ「……………は????」

ぼたん「言われたポルカは、言われるがままに穴が開くほど凝視する。」

すると……

種類：斧 名称：ゴルドアクス ATK75 CRT5

装備可能キャラ 桃鈴ねね

ぼたん「どーよ。」

ポルカ「なん……だと？」

ぼたん「これで殴つてもダメージ入らないのかな？おまるんで試していい？」

ポルカ「ダメだよ。ポ虐反対。」

ぼたん「普通www」

まあ、いいや。とりあえずドロップ品も手に入ったし、まがまが探そつか。」

ポルカ「自由か。」

ばるくっつ!!!
ラミイ「……………ん???

何だ今の擬音?何か膨張するような音が聞こえる。

ねね「はああああああああああ……………!!!」

なんか、なんだろう……………??ねねね、でかくなってね??
こう……………筋肉って言うか、なんかデカ……………デカいつ!!!?
ラミイ「ねねね!!あんたどうしたの急に!?!」

ねね「は あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ
あ—————!!!」
ドン————!!!
!!!!!!!

ねねねが一際大声で叫んだ次の瞬間に、空気抵抗の壁を破ったような音が鳴って、ねねねの立っていた場所の一部がクレーターのように
挟れる。

更に赤いオーラまで出している。えつと……………ドラゴンボール??

ねね「時間がかかってすまなかつたなあ……………」

ラミイ「何いつてんのあんた!?!」

いつの間にか腕に抱かれていた『やめな』は消え去って、ねねね
はマジで超サイヤ人みたいになった。

誰かこの状況説明してほしい!?雪民さーん!!!ねっ子でも可!!!
ねね「行くぞドラゴン!!『やめな』の仇だああああー!!!」
赤いオーラを纏ってマッスルになったねねねが、助走も無しに垂直
に飛び上がる。

明らかに人間が飛び上がって良い高さじゃない高度に飛び上がっ
てもなお上に。上に。とうとうドラゴンが羽ばたいところま
で届いてしまった。

ラミイ「……………ねねね、人間やめるってよ。」

ねね「これは『やめな』の分!!」

ドラゴンのところまで飛び上がったも充分な余力で滞空しているねねの右拳が、ドラゴンの頭にゲンコツを落とす。

「オオオオオオオオオオオオー!??!」

ねね「これも『やめな』の分!!」

ゲンコツで下がった頭に勢いもそのままに膝蹴りを入れるねね。あんだアイドルでしょうが。ガチ戦闘やめな。

流星にそろそろねねの身体も重力に逆らえなくなって来たらしい。滞空が留められずに落ち始める。が

ねね「その首貫ったあああああああー!!!」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAー!??!」

!!!

ドラゴンの首を両手で掴んでトウギャザーしていくう!

さっきまであのドラゴンに命を脅かされていた気がするんだけど、気づいたら異種属格闘技戦になっていた。

何言ってるのか、ラミイも分かんないが、もう勝手にしてほしい。

はい地面に落とされたドラゴンが反撃とばかりに爪で攻撃してくう!!

ねねねこれ evitar! だがしかしドラゴン! ねねねを完全には回避させない!

ねねね、反撃の右アッパー! ドラゴンは尻尾で応戦だあ!

攻めるねねね! 受けて反撃するドラゴン! たまに炎吐いて牽制するあたり多分ねねねより知能が高い!!

うくん、ねねね焦る!! なんか少しずつ赤いオーラとマッスルが萎んできている気がする!!

ねねね攻めきれない!! このまま負けてしまうのか!?

ラミイ「—はっ!? 負けたらラミイも食われるやんけ!!! ねねね—

!! 負けるな—!!!」

ねね「声援が遅い!!! あとだんだん力がいらなくなって来たから助けて欲しい!! ラミイ!! つらら攻撃だ!!」

ラミイ「できるか—!!!」

ねね「はあっ…はあっ…!! っそ—このままじゃ『やめな』の

仇が取れないよお!!!」

ねねねはふぎけ倒しているけど、このまま本当にねねねがすーぱー
ねねちモードじゃなくなったら私達死ぬが!?

誰かー!!助けてよおー!ししろーん!!!!

「力が欲しいか? w w w」

ねね「えっ!?!」

ラミイ「はっ!?!この凛々しくしようとして結局耐えきれずにゲラる
芸風は……!!!」

辺りには森の樹々。もう自分達がどっちの方向から来たのかすら
不明。

圧倒的遭難。圧倒的迷子。にも関わらず、この声には、なんとかし
てくれる頼もしさがある。

ラミイ「ああっ!!ししろん!ラミイを見つけてくれたんだ!ししろ
ん!しs………」

周囲を見渡して、探していた銀色を見つけ出した私は——言葉を
失った。

ポルカ「(ちーん。)」

ぼたん「ポルカ、生きとるかー?」

ポルカ「(白目)」

ラミイ「………何事!?!」

ぼたん「いや〜おまるん、私の足に書いて来れなくってさあ。でも
ラミちゃんの悲鳴は聞こえるし、森の中におまるん捨てていけないか
ら。やむを得ず尻尾掴んで引きずって来たw w w」

ラミイ「………可哀想。おまるんはラミイの悲鳴の犠牲になっ
たんや………」

こんなにボロボロになって……おまるん。

ねね「お前もねっ子にならないか？」読者「すまねえSSRBなんだ」読者「同情で票入れようと思ったけど雪民のプライドが許さなかつたんだ……」

ららーいおん。ららーいおん。採算度外視ららーいおん♪

ホロライブ5期生、獅白ぼたんですー。

現在、異世界に転生そうそう散り散りになったラミちゃんとかねねちゃんとの再会を果たした獅白ぼたんとか尾丸ポルカの二名はですね。ねねちゃんがすーぱーねねちになって放った必殺技『爆裂セクシーねね斬』の犠牲者になったドラゴンから素材を剥ぎ取り、更に、ねねちゃんが余波で開けたクレーターのような大穴の中に隠れていた宝石を発掘しています。

もうねねちゃんが高く売れるって大はしやぎで回収しております。て。

ラミちゃんは疲労と恐怖が一気にぶり返ってきて、さっきまで大泣きしてた後、今は木陰で休憩しており、私とおまるんは現在打つ手もないので、仲良く宝石を鑑定しております。

ポルカ「いやー死ぬかと思ったけど、今は宝石がガツポガツポかゝ世の中分らんもんよね。」

ぼたん「でもわたしとおまるんしか鑑定出来ないってのは意外だったねー。ゲームならステータス確認って標準装備で然るべきじゃない？」

ポルカ「それについては多分、私よりししろの方が鑑定の制度高い疑惑あるよね。」

ししろに言われるまでポルカは全く気づかんかったし。あと眼力入れないと見えないせいで眼球もげそう。」

ぼたん「そうだねー。ラミちゃんが分からないって言ったのも地味に意外だったしね。」

一番後方支援とかになりそうなのに。」

ポルカ「ラミイが召喚獣召喚したって聞いた時はびっくりだっ
思ったもんねー。あとねねちの斧適正。

あまりにもびっくり過ぎてもうさ……マジでゲームなんだなっ
て感じ。」

ぼたん「そうだね。この『サモナイト石』とかだって明らかキア
アイテムっぽいしね。」

おまるんは辛うじて見える程度の鑑定スキルは、私にははつきり見
えている。

ねねちゃんが掘っている宝石は、灰色 赤 紫 緑 無色 この5
種類。割と多めに発掘出来ている割にこの5種類意外は全く出てこ
ない。

更に宝石ごとに名前が異なり、それぞれゲームの属性みたいなもの
を持ち合わせていることも分かった。

色ごとに 機_灰属性_色 鬼_赤属性_色 霊_紫属性_性 獣_緑属性_性 無_無属性_色。

ラミちゃんの話と、戦いの後にいつの間にか手元にあつたと言う刻
印が刻まれたサモナイト石を見るに、このアイテムで召喚獣を喚び出
して使役するのが、正しい使い方らしい。

どうにも、各々が石を持つと僅かに反応を示す石がある。こうふわ
くと発光するんだよね。

私は機属性。ラミちゃんが獣属性。ねねちゃんが鬼属性。

ラミちゃんが持ってた刻印の刻まれたサモナイト石が獣属性であ
る辺り、それぞれが対応する属性みたいなものがあるかもしれない。
ねねちゃんも赤いオーラを発して、反応を示したのが鬼属性なわけ
だし、あながち的外れってことはないんじゃないかなー？

あとはー……まあ。うん。

ぼたん「はい、おまるん。機属性の石。」

ポルカ「うん？はい。」

手渡しでおまるんの手に渡る機属性。反応無し。

ぼたん「はい。鬼属性の石」

ポルカ「これわんちゃんどつちも『きぞくせい』って読むんかね？
ほいほい。」

どうなんだろうねえ？鬼属性、反応無し。

ぼたん「獣属性」

ポルカ「これがしろんやポルカじゃないのは気持ちスツキリしないなー。」

ぼたん「ラミちゃんは獣耳めっちゃつけるからね。」

ポルカ「装飾じゃん！」

獣属性、反応なし。

ぼたん「ねねちゃんが鬼属性つてのは……やっぱあれアルかね？」

ポルカ「ああ……あれだろうねえ。アル。」

そして、最後に霊属性の石。

ぼたん「ラスト。霊属性」

ポルカ「唸れ!!ポルカの隠された才能!!!」

手にポトツと落とす。

ぼたん「反応………無し。」

ポルカ「あああああああああああああー!!!」

何故か、おまるんだけは、反応する属性が無かった。

ねね「ああー疲れたああー。アレ？おまるんまだサモナイト石調べてたの？」

ようやく掘るのに満足したらしいねねちゃんが満面の笑みでクレーターから上がってくる。

まさかり担いだ金太ねね。いい汗かいたと頬もねねぱいも濡れている。

ポルカ「何でポルカだけ反応しないんだよ!?壊れてますか!？」

ねね「宝石が壊れるわけないじゃんw」
すつと鬼属性の石を摘むねねちゃん。

ぼわく。

ポルカ「うわあああああああーん!!! ポルカだけ差別されてるううううううー!!!」
ポルカだけぼわくしないいいー!!!」
ねね「まあでも、このままじゃただ光るだけの宝石なんだよねえ……あーあつつい。」

やれやれといった表情でおまるんの手にサモナイト石を戻したねねちゃんは、ひらひらスカートをパンツ丸見えお構い無しで仰ぐ。
まあ、今更だね。この格好でさっきまで殴り合いしてたんだから。なお、ムキちになった時に伸びたため、コルセットはぶつ壊れたし一部の装飾もお亡くなりになっている。スカートが無事なのは、不幸中の幸いかもしれない。

今の格好で放送したら間違いなくぶつ●される。投稿サイト君に。ホロライブサマーすら没収されたんだから。

野性味たっぷりアイドル服か……ねっ子は増えそうでもあるw
ww

ぼたん「まあ、どつちにしてもこんな島の中じゃどうしようもないでしょ。」
私達このままじゃ雨も風も吹きさらしな状態でサバイバルなわけだ。」

本当は木でも切って急ごしらえでも小屋とか建てれば良いんだけど。ねねちゃん以外が斧を降ってもかすり傷一つ付かないし。

ねねちゃんは、すーぱーねねちじゃ無くなって斧を制動出来なくて、おまるんが5回ほどゆつくりしそうになったところで諦める判断

を下すしか無いなった。というわけだ。

せめて火でも起こさないと本格的にやばいんだけど……こんな森の中で火事になっても洒落にならない。更にラミちゃんが動けない。ポルカ「せめてここが無人島で無いことと、このサモナイト石が少しでも金銭の代わりになってくれることを祈っているしかないわけだ。ぐすん。」

ねね「……………わたしたち、絶対に帰ろうね。」

ポルカ「うん？どうしたん急にマジな顔で」

ねね「ねね、もつとねっ子のみんなに話を聞いて欲しい。ねっ子のみんなの話をききたい。

歌を聞いて欲しいし、ダンスも見て欲しい。二人は？」

ポルカ「んー。今はまあ……ポロポロなんで風呂入りたいかな。あここで夜を明かすと思うとマジで怖いので、誰か一緒に寝て欲しい。」

ぼたん「みんなで今日のコラボの続きをしたいかな。」

ねね「ラミイはー!？」

ラミイ「……………お酒しやけえー」

ぼたん・ねね・ポルカ「デスヨネー。」

ねね「目的は違うけど、みんなちゃんと帰りたい気持ち忘れずに行こうね。」

人間、本当に追い詰められると、自分が本当にしたかったこと、忘れちゃうから。

わたし、まだV T u b e rでいたい…………。」

それは、普段私達が見ているのとは違うねねちゃんの表情だ。

『桃鈴ねね』の、ほんとうのきもち。

ねね「ねっ子ゆみんなが——大好きだあああああああああ
あ—————!!!!!!」

島中に響くような大きな心で、桃鈴ねねは大きく叫ぶ。それはいつものように、あどけない、いつものねねちゃんの表情だった。

夜会話——『??』

日が昇って、日を見送って、闇に輝く月明かりが、この暗闇の島を照らす唯一の加護だ。

どうしよう。日が沈んでしまう。どうしよう。怖い夜が来てしまう。

V T u b e r の設定が大きく反映されているこのカラダでも、私は私で、心は変わらない。

キャラ崩壊なんて言わないで欲しい。これも私なんです。

はしゃいで、騒いで、道化て、泣いて、落ち込んで……私は。

尾丸ポルカは、生きています。

こんなところにいきなり放り込まれて、眠れるほど私は強くはない。

いいや、私達は強くない。

ラミイと共に身を寄せ合いながら、不確定の闇に怯えて。

……何故かひとり大爆睡しているねねちは、ぶん殴ってもいいですか？

この娘は、緊張感とか無いんですかね？きつきなんかこういう感じに格好いい事言ってたような気がするのはポルカの気の所為ですか？

ねね「ぐおおおおくくZZZZ」

ラミイ「……ねねね、ぶん殴ってもいいかな？フフフ」

ポルカ「良いんじゃないですかねえ？フフフ」
それでも、このいつもどおりのねねちが、私達の唯一の精神安定剤になっているのも否めなくて。

ギリギリを保ってくれているのも。まあ、事実なわけですよ。だが殴りたい。

ラミイ「ぐすつ……お酒飲みたい。お酒飲んで眠ったら、ラミイのお部屋だったら良いのに。」

ポルカ「あー腹減った。なんでポルカ達はこんなところにいるんですかねえ？

ぶつちやけさあ、ししろがこういう世界に来るのはまだしつくり来るけど、ポルカいるか？

現状唯一なんの武器もありませんが？」

ラミイ「ラミイだって『やめな』なんてネタ武器だよ。せめて進化後だいふくだったらもう少し安心できたのに……………」

ポルカ「召喚してみれば良いんじゃない？『だいふく』とか『雪民』とかさあ。」

ラミイ「もうやってみた。」

ポルカ「やったんかい!? それで?」

ラミイ「だいふくも、雪民も、やめなーすら出なかつたよ。」

手のひらに乗った刻印付きの緑のサモナイト石を恨めしそうに見つめるラミイ。

ラミイ「なんで雪民さん出てこんのや!! ガチのラミイに会えるチャンスやぞ!! ラミイのこと愛しとらんのか!？」

ポルカ「んな理不尽な……………」

ラミイ「ぐすつ…………雪民さあん…ラミイにお酒持ってきてよお」

ポルカ「雪民さんも、お酒パシる為だけに喚ばれるのは嫌だろうねえ」

他愛のない雑談を続けて、続けて。

いつか、私達は眠っていた。

—————

ららーいおん。獅白ぼたんです。ネコ科ですw

今私はネコ科の夜目を利用して『矢』を探しています。

何故かスポン地点に弓と矢が一对になっていた。

現実的に考えても当然おかしいけど、ゲーム世界的に考えてもこれ

は異常だ。

矢が一本しか無い弓なんて……。

それに、単純に何故、海辺にそんなものが落ちていたのか。

その謎を解き明かすため、獅白ぼたんは森の奥地——スポン地点へと向かった。

ぼたん「……………うん。見事になんも落ちてない。流木すらな
いって言うのはなあ。」

ステステステと散歩ぐらいの気持ちで海辺を探索する。

ぼたん「このままじゃ、戦いで役立たずという新しい獅白ぼたんが
誕生してしまう。」

こうなったらおまるんを盾にして近接戦闘するしか……お？なん
か光つてるところある！

アイテムアイテム♪」

ししろんは、サモナイト石（霊）をひろった!!

ぼたん「まーたサモナイト石かー☒☒

もうそろそろサモナイト石はいらないです。ポケットもパンパン
だしカバンも無いんだもんなー。」

『……………』

ぼたん「およっ？」

『……………』

ぼたん「声……………？」

『……………』

ぼたん「誰……………？誰かいますかー!？」

『……………』ぼたんちゃん……………』

ぼたん「え!？」

聞き覚えがある。この声……この声は——

ぼたん「かなた先輩!?!?かなた先輩どこですか!!!」

『ぼたんちゃん!!?繋がった!!?繋がったよトワ!!』

『もう魔力も残り少ないよ!!急いでかなた!もう……かなりきつつい…』

『根性入れるのら!!トワトワ!!』

『もうムリムリムリムリー!!早くしてかなたー!!!』

これ、もしかしてサモナイト石か?

『ぼたんちゃん!聴こえてる?かなただよ!』

ぼたん「はい!聴こえてますかなた先輩!!今私達はねぼらぼでいつの間にかドラゴンとかがいる島にいます!!」

あとサモナイト石とかいう石があります!どこかわかりますか!』『やっぱり!!ぼたんちゃんよく聞いて!!そこは『リインバウム』っていう本物の異世界で、そこはハゲが作った人工島だよ!』

ぼたん「人工……!??っていうか、もしかしてかなた先輩ここ来たことあるの!?!?」

『そうだよ。ボク達も——四期生もまだココが現役だった時代に召喚されたことがあるの。』

その石をぼたんちゃんが持つてるからには、おんなじ島に召喚されてるはずだから、還る手段もちゃんとするの。』

ぼたん「還れる……どうすれば良いんですか?」

『島の中心に、召喚のために作られた祭壇があるの。それを使えば還れる………んだけど、実は昔還る時に壊しちゃったんだよね。』

ぼたん「うええ?!?握りつぶしちゃったんですかかなた先輩!?!」

『そんな拳デカクねえよ!!!——ってツツコませるなあ!!』

とにかく、ぼたんちゃん。まずはその島にあるはずの『メイメイさんのお店』を探して。そこにいるメイメイさんに事情を説明すれば力になってくれるはずだから!』

ぼたん「メイメイさんのお店?!?この島無人島じゃないんですね……。」

『ううん。実質無人島だよ。なのに何故かそこでお店やってるんだよ。』

ぼたん「その人大丈夫なんですか？（主に頭）」

『うん。まあ、酔っぱらいのヘラヘラしてるお姉さんだけど、まあ、大丈夫だよ。』

ぼたん「あー、わかりました。それで、メイメイさんの店ってどのへんにあるんですか？」

『メイメイさんのお店は、島の——……………』

しーん。

ぼたん「……………かなた先輩ー？」

サモナイト石、完全に沈黙。

ぼたん「……………まじかあw」

どうやら、通信が切れたらしい。

そう気づいたときには、新しい朝を告げるべく、朝日が昇り始めてきていたところだった。

ぼたん「かえるか。みんなんところ。」

二日目

ポルカ「で、このドラゴンなんかはぎ取れたん？」ぼたん「鱗が固くて無理です」ねね「これ食べられるかな？」ラミイ「拾い食いやめなー!!!」

ポルカおるよー。尾丸ポルカです。

新しい朝がきたー。希望ください朝ーだ……ああ……お腹減つたよお。

魚人やドラゴンが湧いてくる異世界生活の二日目でございます。水も見つからず、木の実のひとつも見つからず。ポルカは餓えています。

元気なのはねねちと、ししろんも平常通りを保っています。ラミイは……察しろ。

何て言うかさあ……ししろんはまだ分かるじゃん？獅子だしさあ。ご飯抜き2日3日は当たり前って言うし。

私は設定はクォーターで、四分の三は人間だ。

けど、ねねちは人間じゃん？何で元気なのって聞いたらなんて言っただと思う？

ねね「人間、ご飯や家が無くても一日二日くらいどうとでもなるんだよ。ねねは一日ガム一個の時代もあったからね!!」

………ねねち……。

少し涙が溢れた。

ぼたん「みんな、かなた先輩と連絡が取れたぞ!!」

ラミイ「え!?本当に?」

ねね「おおー!!」

朝起きたら姿が見えなくて焦っていたししろが戻ってきた邂逅一番、そんなことを言い出した。

ポルカ「かなた先輩に？どうやって連絡取れたん??」

ぼたん「浜辺で矢が残ってないか探したら、またサモナイト石見つけてさ、そこから声が聴こえたんよ。」

なんとここ、昔、四期生も来たことがあるらしい。」

ラミイ「それじゃあ、還る方法もあるんだよね!？」

ラミイが希望に満ち溢れた声を出す。私ももちろんそれを期待している。

だって四期生は今間違いないわたちたちの世界にいる。つまり、この世界に来てから帰還しているということなのだから。

けど、ししろの返答は、そんな期待を真つ向から否定するものだった。

ぼたん「それが…島の真ん中に転送用の祭壇が有るらしいんだけど、四期生が還るときにぶっ壊したらしい……」

ラミイ「なんでよ!？」

ポルカ「そりゃあ、ドラゴンとかポルカたちの世界に来られても困るからでは?」

ラミイ「ううう……つつ」

恨めしそうな声で唸るラミイ。気持ちは分かる。そりゃあ、あんなのが来たら世界中大パニックだが、今のポルカ達にはその祭壇が壊れているのは死活問題だ。

もも「それで、これからどうすれば良いとかは聞けた?ししろん」
ぼたん「うん。話の途中で通話が切れちゃったから、全部は聞けなかったけど、この島は無人島だけど何故かお店があるらしい。」

ポルカ「無人島にお店をやっている人……??え?それ誰が買いに来るの?」

ぼたん「さあ?でも私達がたどり着けばお客になれるんじゃない?」
酔っぱらい店主らしいから、食べ物も食べるだろうし、水やお酒も」

ラミイ「お酒え!!？」

ぼたん・ねね・ポルカ「はいはいはいはい。」

ぼたん「まあ、そんなわけだから、私達はこれからメイメイさんのお店を探すがメインクエストになります。」

ポルカ「この未開の島で、ドラゴン警戒しながら、どこにあるか分からない店を探すって、無茶苦茶激むずじやん。

初手のメインクエストとは思えねえ!!」

ぼたん「留守番したい? 多分戻っては来れないけど」

ポルカ「同行させてくださいお願いします」

ししろん、この島に来てからポ虐が進み過ぎじゃないですかね? しまいにやポルカ、泣きますよ?

ぼたん「ねねちゃんはどうする?」

ねね「もちろん行くよ。ねねが行かずに誰が行くの? 戦えるのねだけなんだよ」

ポルカ「その斧、主にポルカの首にばっかり来るんですけどね?」

ねね「ああこの斧は座員さんだったか」

ポルカ「ポルカの座員さんはポルカの首なんて狙って来ないもん!!」

ぼたん「なお異世界座員1号」

ポルカ「やめろおおおおおおおおおー!!!」

ねね「そっか、これ座員さんの斧だったね。そりやおまるのところにいくのも仕方ない」

ポルカ「もっとお姫さま的に愛されたい……っつ!!」

ぼたん「さてと、それじゃあ特に準備もいらないうし【メインクエスト】『メイメイさんのお店を探せ』に出発しますか」。

ねね・ポルカ「おー!」

ラミイ「あのお……」

ぼたん「ラミちゃん?」

ポルカ「?どしたのラミイ?」

ねね「何かあった?」

ラミイ「……………恥ずかしながら、お酒が切れてもう動けましえん。誰か助けてください……………」

よく見てみると、なんか手が震えているラミイ。

え？そんな大げさにアル中な子じゃなかったよね?!?

ぼたん「……………もしかして、ラミちゃん。いや、私達のカラダって、ホロライブの設定だけじゃなくて、配信で積み重ねたリスナーからのイメージも誇張して現れてるんかな？」

ポルカ「……………もしかしてししろんが全然疲れてる感じしてないのも？」

ぼたん「FPS配信してるし銃の知識もあるから『獅白ぼたんならサバイバルでも生きていけるんじゃない？』ってイメージが誇張されてるのかも。」

ポルカ「ねねちがねねちのままなのも？」

ぼたん「ねねちゃんなら『別にサバイバルぐらいでくたばらんやろ』ってイメージがあるのかもしれない。

もともと社畜だったって言うし努力家でもある。更に小学生男子のイメージも手伝って最強に見えるのかも。」

ポルカ「そう言えば、ねねちって、19歳の設定だったな……………」
ぼたん「ブラック企業に努めて地獄を見てきたメンタルに、十九歳という若く瑞々しい肉体……………!!」

ぼたん・ポルカ「弱いわけがない!!!」

ねね「？」

わたしとししろが振り向くと、何か言った？みたいな顔してラミイをおんぶしていたねねちがいた。

ポルカ「あ、社長。ラミイはポルカが背負います。役立たずががんばります。チーズ。」

ねね「そう？…じゃあねねはバトルで活躍するよ。ラミイは任せたよ！おまるん」

ポルカ「はい……っ!!」

なんとなく頬を濡らした涙。

これは雨だな。きつとそうだ。断じて自分の活躍の機会がないことに関する悲しみの涙じゃない。

見せ場が……欲しいです……!!!!

かなた「リインバウム？」白上「現実じやい。」友人A
「事後処理が………つつ」

白上「えー……皆様、おはコンでございます。白上フブキでございます。

本日はですねえ……えーさくや——昨夜……ですねえ。

不幸な事故が重なりまして。ねぼらぼコラボ配信。白上も4窓開いて観ていたわけなんですけども。急に四人全員の配信が突如途切れるという謎の現象が起きまして、ですねえ。白上、速攻デイスで連絡を取りましたところ、なんと音信不通!!」

コメント：おはコン

コメント：白上も観てたのか

コメント：4窓

コメント：4窓ってww

コメント：4窓はガチw

コメント：音信不通!?

白上「これはもう只事ではないと察した白上は真相を探るべく、専門家のえーちゃんに突撃した………!!」

友人A「えー。皆様、おはコンです。ホロライブ事務所の裏方担当、友人Aです。

今回は昨夜のねぼらぼコラボ配信が突如、止まってしまうという現象について、何故か専門家として喚ばれてしまいました。

何故なのでしょうか……?」

コメント：草

コメント：頑張れえーちゃん

コメント：何だただの放送事故だったのか

コメント：安心したから白上の尻尾モフらせて

コメント：じゃ俺はえーちゃんのまな板でPHPHしたい。

コメント：PHPHするだけの大きさが——

コメント：→良いやつだったよ……

白上「——そんなわけで皆さん。昨夜のことはく忘れろビーム！」
コメント：VTuberってなんですか？

白上「忘れ過ぎなんじゃない！」

—————

配信が終了し、ホロライブの事務所には

ホロライブ一期生、兼ゲーマーズのリーダー。白上フブキ。

そして、ホロライブ事務所の裏方。友人A

更に、四期生の天音かなた。姫森ルーナの四名が訪れていた。

友人A「それではかなたさん。状況の説明をお願いします。」

かなた「はい。今回の『ねぼらぼ』同時失踪の件についてですが、やはりボク達が睨んだ通りでした。」

四人全員が、かつてボク達四期生が召喚された異世界『リインバウム』に召喚されていたことが、通信に成功したぼたんちゃんの発言で確認出来ました。」

ルーナ「残念なことにトワが途中でへたれて通信が切れたから、詳しいことは聞けなかったのらく」

白上「トワ様は今どうしてるの？」

ルーナ「MP使いすぎて死にかけてるのらよ。あっちと違って、MP回復も体調依存だから無理なのらく」

友人A「リインバウムですか。あの時と違って情報があるだけマシではありませんね。おかげでフブキさんと一緒にある程度の説明配信をすることで炎上を可能な限り抑えることは出来たと思います。」

かなた「それで、とりあえずぼたんちゃんに、向こうでお世話になった『メイメイさん』という人のお店を探すようにだけ伝えたところで、

通信が切れてしまいました。」

白上「それじゃあ、四人は今無事なのかな？」

かなた「昨夜話した限りでは、ぼたんちゃんはまだあまり問題ないように感じました。」

他の3人がどうなのかは、確認できませんでした。けど、ボク達もそうでしたけど、あの世界に行くとな自分のVTuberとしてのカラダと、設定、リスナーからの印象で強烈なものが反映されて受肉します。

例えばボクが、『手のひらに収まる程度の大きさの程度のものを握りつぶせる』『翼で飛べる』みたいな、オルタナティブに使えそうな能力が付与されました。」

ルーナ「ルーナは『ルーナイトを召喚できる』能力なのらく」

白上「それじゃあ、四人にもそんな能力があるのかな？」

かなた「多分あると思う。ぼたんちゃん、声が少しわくわくしている感じがしてたから。きつと本人も気付いているんじゃないかな？」

友人A「本当に、ホロぐらも真つ青な話ですね。」

白上「それはどうかな？」

かなた「それは無いです。」

ルーナ「ないのらく」

友人A「あ、そうですか……。」

かなた「危険性だけなら、ラインバウムはホロぐらに負けないけどね……。」

その頃、ラインバウムでのねぼらは……

ぼたん「走れおまるん!!死ぬぞ」

ねね「頑張れおまるん!!」

ポルカ「む、無理い!!ラミイ背負つとるんやぞ!!」

ラミイ「ふにゆう……」

ねね「無理は嘘つきの言葉だ!!」

ポルカ「ふっぎけんあああああああ———!!!」

ライオンのような顔の獣人が、弓を番えて襲ってきていたのだっ
た。

ねね・ポルカ・ラミイ「「助けてししろん!!!」「」しし
ろん「やっべえ死にそうwww」

獅白ぼたん、われわれ一同が挨拶できないこの状況をお許しください。
い。

現在、ライオン顔の獣人が弓を番えながら迫ってきています。

ねねちゃんが接近戦を挑んだ瞬間、大剣に持ち帰られたので、今度はねほらほ一願となって命辛辛苦逃げてます!

でもおまるんがラミちゃん背負ってて遅いんでもうあの世ストレスです。しかも逃げてる途中に一匹増えた!!

何故こうなったのか?

遡ること……いや、時間が分からんなw

森の中を進んで、どのくらい時間が経っただろうか?

私は獅白ぼたんのカラダのおかげでもう、とにかく元気だった。獅子は良いぞ。って感じでゴキゲンに歩いてた。

ねねちゃんもそんな感じだった。19歳の若い肉体。そこにねねちゃんメンタル。弱いわけがない。

子泣きじじいという宿業を背負い、生まれたての子鹿の如く勇ましい歩を進めるおまるん!

ポルカ「……………泣き、そう…」

ねね「おまるん、替わろっか?」

ポルカ「……………いえ、ガンバリマス。」

ぼたん「私かねねちゃんの方がずっと力あるんだけどね」

ポルカ「ポルカがやるのおおおおおおーーー!!!」
(泣)

ぼたん「もう手出せねえじゃんwww」

ねね「いやーこれはしゃーないね。」

ぼたん・ねね「私達は悪くない!!」

ぼたん「つと、流石にそろそろ助けに行かないとマズいな。」

タン、と地面を蹴ってカラダを可能な限り水平に保って直進していく。

まさに二足歩行の獅子にふさわしいスピードで走り抜く。ししろんのカラダじゃなかったら絶対に出来ないね。

「G A A A A A A A O !!!」

遙か先に弓を番える獣人の姿。おまるんには見えていないようだ。ヒュン——!!

私がおまるんに着くより先に矢が放たれる。間に合うか？

ぼたん「おまるん伏せ!!!」

ポルカ「え!?!ワン!!!」

獣の筋力で射撃された矢は撃って来たと思っただけもう目の前にあるぐらい早い。

多分わたし以外見えてない説はある。だから矢は私が対処するしかない。

顔面アウトの射線から頭をずらして、矢を頭の横に迎える。ここまですれば多分……

パシッ。

ぼたん「よし!!矢確保!!」

ポルカ「え!?!アンタ掴んだんか!?!」

ラミイ「……うにゅ……?」

ねね「いいぞししろん!!」

手に入れた貴重な一本の矢を番える。今更ながらこちら洋弓なので、素人でも全く撃てないなんてことはない。

でなきゃゼロ距離といえど射撃なんか出来るわけもない。

それでも私と獣人の距離は遠い。マイクラならギリ当たるかもな距離。素人が間違っても射抜ける距離ではない。

よって

ぼたん「おし、逃げろおまるん!」

ポルカ「ポルカ、逃げまーす!!」

敵は獣人二匹。武器は弓と大剣持ちが一匹。槍持ちが一匹。距離を詰めれば仕留められるかもしれない。弓持ちを倒せば矢筒を奪えるはず。

いや、無理でしょ。ここはやっぱり……

ぼたん「ねねちゃん! 足止めしよう!」

ねね「おっけー!」

槍持ちの獣人が迫ってくる中、ねねちゃんも追いついてきて、私の横を通り過ぎて行く。

両者激突する雰囲気。

弓持ちが私が弓を番えているのを警戒しているのか、私から目を離さない。

実力がバレてないって素晴らしいですねえw

ぼたん（……けど、連携が出来るほど知能はヒト寄りのモンスターなんだね。

罠にハマてトドメだけ刺すって言うのは、無理臭いなあ。）

ねね「おりゃあ!!」

考えを纏めている間に、ねねちゃんが槍持ちにたどり着いて交戦開始。

勢い良く攻めているような声を出してるけど、槍のほうが当然リッチは長いし、斧は剣と違って刃を当てて引けば斬れるってわけでもなく、ある程度振り回して、打撃に近い行動を取らなきゃいけない。

「ガオツ!!」

ねね「くっ……!!」

それに引き換え、槍の方は自分のカラダを小さく纏めて腕を前に出すだけで、外皮が柔らかい相手には十分な殺傷力がある。

どうあがいても、直線で攻撃してくる槍に、曲線で攻撃する斧が速さで勝てるわけもなく。ねねちゃんは全く攻撃に移れない。

斧を横にして、盾のように防ぐので精一杯だ。

「グオオオオオー!!!」

一方、弓持ちの方も武器を大剣に変えて私に接近してきた。

ぼたん「うわあ、やっぱいw」

咄嗟に近くの木に登って上を取る。それと同時に剣が私が登った木を切り倒す。

ぼたん「いや嘘やんwww」

剣で木切ったぞコイツw

ねね「やっぱいよコレ……っ!!」

木が倒れる前に他の木に飛び移った。ちらりとねねちゃんの方を見ると、所々で防ぎきれずに切り傷が出来ている。

これは予想以上にマズイ。おまるもなんとか遠くに逃げたし、私達も離脱しないと。

けど、どっちへ逃げるべきか？おまるん達と離れるのは、危険ではある。けど今元気モリモリないつらを連れて行っても、同じことの繰り返しなのは目見えるわけで……まじどうしようか。

ぼたん「……………」

ねね「はあっ……はあっ……!!!」

ねねちゃんは限界だな。そもそも獣人なんて見るからに身体スベックが違う相手に、武器まで相性有利。

だっていうのにねねちゃんは、肉体は瑞々しくなっても、種族はヒューマン。ここまで耐えただけでも相当だ。

ぼたん「……………しゃーねえな。SSRBは、この状態に入れる保険あつたら紹介してくれよな。」

覚悟は決めた。よろしい。ならば実行だ。

一本だけ手に入った弓を番えて、槍持ちに照準を合わせる。

ねね「きやあっ!!」

ねねちゃんが、足に槍を食らって膝をつく。ナイスタイミングだ。

シュツ——!!

「ガアアアアアアー!?!」

撃った矢が上手いこと槍持ちの肩に当たった。

ぼたん「うりやあ!!」

ねね「ねねも頑張るぞ!!」ぼたん「成長したな……
ねねちゃん。」

こんねね〜！挨拶は大事！桃鈴ねねです!!

怖いです!!

ライオンが武器持って襲って来たんだもの。怖くないわけがないあ!?

けど、それよりも今は未来が怖い。

ししろんが笑ってた。普段のゲライオンのじゃない。これは、ブ
ラック時代に見たことがある顔だ。

『自分が死ぬかもしれないことを自覚している顔』だ。それでも後に
引けない、逃げられない顔。

友達が、そんな顔してて欲しいわけがない。本当に死にかねない。

ぼたん「ねねちゃん、そいつにトドメ刺して!!」

そんな必死な顔で言わないでほしいよ。そんな必死な声で。

この状況でそんな事思うねねの方が絶対におかしい。それでも、ね
ねはみんなに笑っててほしいんだよお。

「!!」

だから起き上がった。斧を拾って。足の痛みは無視！超痛いけど
無視!!

歯を食いしばって、涙が出てくるのも構うこと無くししろんが蹴り
飛ばした獣人の頭に斧でクラッシュ!!

「グオオオオオ!!」

プシュ——ツツツ!!

ねねの斧が獣人の頭にたどり着く直前に、獣人が槍を向けてきた。防御なんて頭になかったらしく、放たれた槍が、ねねの頬を僅かに掠る。

ねね「はあっ……はあっ……!!」

頬から流れる血を拭いながら、息を整える。

ドラゴンの時とは違う、嫌な気持ち心が蝕んでくる。本能だけで襲ってきていたと思うドラゴンとは違って、獣人達はヒトに近い形に、武器を扱って、狩りのように襲ってくる。

まるで、人を殺したような、嫌な気持ちに……押しつぶされそう。挟まれた足が痛い。重い斧を力ずくで振り回したせいで、余計に負担がかかったんだ。

痛いし、怖いし、辛い。もう無理……っ

押しつぶされ——

ぼたん「うおおおおおおおおおおおおお——!!!」

ねね「???」

押しつぶされそうになった瞬間、ししろんが吠えた。

ぼたん「せめて、ねねちゃんだけでも逃してみせる。」

ねね「……ししろん……。」

弱い気持ちに押しつぶされそうになりかけた。そんな場合じゃないだろねね!!

ししろんはもう丸腰なんだ!ねねがやるんだ!足が痛い?怖い?

もう無理?

ねね「——無理は嘘つきの言葉だあああああああああ

あ——!!!」

喉が枯れるほど叫ぶ。弱い気持ちを押しつぶすために。もう一度

すーぱーねねちに……!!

《桃鈴ねねがスキル：【糞ブラック根性論】を獲得しました。》

ねね「——!! 『爆裂セクシーねねち斬』!!!」

薄っすらとカラダから湧き上がる赤いオーラが、昨日と同じく斧に移動する。

今できる全力——ぶつけていこう!!!

ねね「——ゲフツ——!?!」

吐いた。唐突に、赤い何かを……あともう少しの所なのに、斧が当たらない。意識が……遠……い

ししろん……

《獅白ぼたんがスキル【ライオン・プライド】を獲得しました。》

ぼたん「うおりやあああああああ——!!!」

最後に聴こえたのは、いつもの、ねねが大好きな、ししろんの声だった……。

『ポルカ、おるか？ポルカおらんかー？』ポルカ「サモナイト石返せ」

ラミイ「……………ここ、どこ……………？」

……………歩いている。

わたしは、おまるんの背に乗っていたはずだったのに？

……………歩いている。

たった一人で？

……………歩いて、いる。

みんなはどこ？

……………歩いて……………いる。

何処に歩いているの？

……………歩いて……………いる……………。

「ふくん……………こんな島にまた召喚される人がいるなんてねえ……………」

だ……………れ……………？

「ねえ、お姉さん。どこから来たの？」

分からない……………。

「何処へ向かうの？」

分からない……………。

「あららくこれはこれは……………ちよつといけない状態になつてるなあ。」

みんな……………。

「うん？どうしたの？」

みんな……………を……………助けて……………

「何があつたのかな？」

襲われ……………てる、の。

「それは大変。じゃあ、お姉さんが助けてあげないと。」

わたしに……何が、出来るの……？

「簡単なことが出来るんだよ。お姉ちゃんが出来ることだけのこと。」

ラミイに……出来ること……？

なにが……出来るの？わたしに……なにが？

「例えば、懐の召喚獣を喚ぶのはどう？その子、とっても強い繋がりを
感じるよ？」

召喚獣……？やめな……？

でも、一度出て来てから、全然出てこなくなつて…

「それはね、召喚術の中には、絆が必要なものもあるからだよ。」

絆……？

「よく思い出してみて、お姉さん。その子を呼ぶ時、何がしたかったの
？」

……わたしは……

—————

ポルカおるかー？おるよー。5期生の金髪のプロペラが回る方、尾
丸ポルカです。多分もうすぐ死にまーす!!ポルカ終わるかー？

アンケートでポル望んだやつら絶対許さんからな!!!おかけでポル
カは今——

獣人×50 「—————!!!」

ポルカ「ぎやあああああ—————!!!」
ししろんとねねちが引き受けてくれた敵の2.5倍の数の敵に追わ
れとるんやぞ!!!

しかも背中にはラミイ!!ここまで一度も離してない!!ポルカ偉い
!!!!

けど辛い!!人間背負つて捕まったらデッドエンドの鬼ごっこか
無いわー!!

おいこら!!弓撃つな!!槍投げるな!!卑怯やぞ!!!アアアアアアア
!足が重い、カラダが重い、ラミイが重い!!!

今度こそマジで食われるかもしれん!!わため先輩的な意味で!!

ラミイ「……………ん……………あれ……………?」

ポルカ「アアアア……………死ぬう……………ここに来てから水1杯飲んでない……………」

ラミイ「……………おまるん……………??」

ポルカ「——ん?ああ……………起きたんか眠り姫え……………せつかくお目覚めのところだけど、もうすぐポルカ達永遠の眠りに付くかもしれんからそのつもりで。」

ラミイ「……………どこに向かつてるの?」

ポルカ「地獄だろうよ!?片道切符でな!!」

ラミイ「……………じゃあ……………みんなのところに……………行きたいな。」

ポルカ「ラミイ!?その言い方だともうデッドエンドまっしぐらだぞ!?悲壮感極大の悲劇のヒロインになるな!!」

ラミイ「見つけたの。」

ポルカ「見つけた?何を!」

ここまですつと尾丸ポルカ、ラミイを背負ってジグザグに走って矢もやりも避けて走っています。色違い出すときだつてここまで走つてねえ。ラミイには一発も被弾してません。褒めて。

そろそろ足が生まれたての子鹿!!あ!!雨まで降ってきたア!?

「ガオオオオオオオオオオオオオオオオオー!!!」

ポルカ「嘘でしょ!?!目の前にも来やがった!?!助けてししろーん!!!」
ズルン。

ポルカ「あ」

背中には護るべきもの。天空からは雨。後方の獣。眼前にはもつと獣。更に足元に雨で泥濘んだ泥入りましたア!!!

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!弓が!!槍
が!!剣が!!爪が来る!!!

死ぬアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!

ぎゆ……………つ。

ポルカ・ラミイ（絶句）

みなさんこんにちは。おひさしぶりです。ポルカはいきてます。なんか4ヶ月くらい走らせ続けた気がする4分間。

『まだまだ着いておいで、笑い転げちゃうサーカス！きつとつ、ここだけだよ♪』

まさか歌の4分と4ヶ月を掛けるためだけに更新4ヶ月サボったんじゃないだろうかと、ガチ恋距離で問い詰めたい今日この頃。皆様いかがお過ごしでしょうか。

ポルカは走った時間はきつちり4分。背負った披露はしつかり4ヶ月分です。今ならもしかしたらこの胸に溜まった気持ちでポルカも進化出来るかも知れない。

あ、やっぱ無理だ。ポルカの胸、ナーフされてたんだったわ。溜まったもの大してないわ。

ラミイ「がんばれーおまるーん。」

5期生の胸がしつかり拘られていた方、雪花ラミイさんはもう完全に緊張感ないなってるよ…。

『今にも世界中を！虜にしちゃうから！』

ポルカ「あーようやく歌が終わる…：ポルカ、自分の曲が終わることに安堵する初めてのVTubeerかもしれんわ。

さあ！そろそろいい加減ポ虐タイムを終わらせて反撃させてもらおうか!!」

『~~~~~♪』

曲の最後の伴奏が終わった。

これから何が起るのかは分からない。それでも、ここから何かが変わるはずなんだ！

ラミイ「おまるんの反撃が、ついに始まる…：!!」
「グオオオオオオー!!!」

最後まで付いてきてくれたお前たちにも、多少は愛着が湧いた気もするけどな…けど、ポルカ達は所詮は別の生き物。同じ世界では生き

多分、今ポルカはとつても感情の無い目をしていることでしょう。ラミイは見えていないらしいが、ポルカにはしつかり見えているからね。アレが何か。アレは……

ポルカ「……………タライじゃねえか。」

そしてさらに

ー スココココココココココココココココココココ!!!

まるで英雄王の財宝のように、空からスコールのように降り注ぐ金ダライの雨が、何十体もいた敵さんをギャグ時空のように蹂躪していく。

やられた敵さんは、目をクルクルにして、舌がでろんってなっ、もう完全にギャグです。

ラミイ「これ、時間稼ぎにはなりそうだね……………うん」

ポトツ。またなんか降ってきたわ。今度はポルカの足元に。

何だ？ポルカにも金ダライ当てるつもりだったのか？そろそろガチで戦争するか？ん？

ポルカ「……………芝刈り機」

ラミイ「いでよダイフク……………なんちやって。」

その掛け声に呼応したかのように、もう一つ。いや、一体が降ってきた。

ええ。ホロぐらで芝刈り機ついたらもう、聡明な雪民の皆さんには説明すら烏滸がましいでしょうよ。そりやもう、あのダイフクが降ってきましたよ。そして芝刈り機をその手に掴みましたよ。

それでは皆さん。ご唱和ください。

せーのっ

芝刈り機『ぎゅいひいひいひいひいーん！バリバリバリバリバリ……!!!』(ラミイボイス)

ラミイの激かわボイスで奏でる芝刈り機の独唱の始まりです。

バックコーラスは先程までタライを食らっていた獣人コーラス隊の皆さんです。いい声ですねー。

ええ。今ポルカが見ている光景。もうお分かりですね。

ダイフクが持つ芝刈り機に引かれて、ぐちゃぐちゃのミンチにされていく獣人達の阿鼻叫喚地獄絵図の光景です……………。

ラミイ「……………。」

ポルカ「タライで昏倒させた後に、後始末の芝刈り機か……………」

ラミイ「……………。(気絶)」

ポルカ「ああ。もうゆっくりお休み。ラミイ。多分全部終わった頃にはその結界も解けてるだろうから、そしたらしろんたち探しに行こうな。」

この後、森の一部は真っ赤に染め上がり、やめなーは消えて、透明な石がポルカの手元に出現した。

……………多分、アレはラミイがダイフク呼んだからあの地獄絵図になっただよ。きつとポルカが使う分には、ギャグ漫画攻撃で済むはずだよ。そう自分に言い聞かせながら、ポルカは初めてまともに戦えるかも知れない手段をギリギリ捨てずに、持ち歩くことにするのだった。

ポルカ「多分、滅多に使わないと思うけどな……………」